

連載

実験的教育論 [9]

誰に何を投資するのか

まちだ そうほう

広島大学大学院教授 **町田宗鳳**

儲かる投資法、教えます

伝統ある教育誌上でお金の話とは何事か、とお叱りを受けそうだが、今回のエッセイを辛抱強くお読みいただければ、読者の懐具合にも改善が見られるかもしれないので、ぜひ大目に見ていただきたい。

それにしても、昨今は個人投資家が急増中である。年金も営々と働いて稼いだ給料袋から毎月しっかりと引き抜かれているにもかかわらず、その行く末が怪しくなってきた。そのような状況下、定年退職後の生活安定のために、積極的に投資し始めた中高年も少なくない。

また若い世代を中心に、パソコンを駆使してのデイトレーディングが人気を博している。うまくいけば月々の給与よりも、はるかに大きな額面の不労収入が、瞬時にして懐に入ってくるので、病みつきになってしまうのであろう。

書店にいくと、『百万円で一億円を稼ぐ』というような威勢のいいタイトルの本が並んでおり、主婦の中でも下手なへそくりをするより、一攫千金を狙おうと、株式投資に血道を上げている人もいる。

ホリエモンや村上氏の騒ぎも、そのような社会風潮の

中で起きたものであり、かつて日本国民のことを「一億総白痴化」と揶揄したジャーナリストがいたが、今はさしずめ「一億総投資家」となりつつあるのかもしれない。

しかし株というのは、儲ける人がいる分だけ、損をしている人もいることを忘れてはならない。ましてや預けた現金を担保に証券金融や証券会社などから資金を借りて投資する信用取引では、株の乱高下でとんでもない損失を蒙ることもあるから、注意するにこしたことはない。

私がニューヨーク近郊に住んでいたころ、土砂降りのマンハッタンの街をさぶ濡れになって歩く紳士がいたので、思わず「それじゃ、高級スーツが可哀想ですよ」と冗談めいて話しかけると、「今日は株で大損をしたから、そんなことはどうでもいいんだ」と足早に過ぎ去っていった男性がいたことを思い出す。

私自身は『百万円で一億円を稼ぐ』ような幸運に巡り合ったことはないが、ごく親しくしている友人に、投資によって一億円どころか、数百億円の資産をなしたK氏という人物がいる。だから、これから書くことは、ほとんど彼の話の受け売りだと思って、読んでいただきたい。K氏によれば、お金儲けはそんなに難しいことではな

く、きわめてシンプルな法則に従うだけである。どんな法則かといえば、春になれば新芽が吹き、秋になれば葉が枯れる。水は高いところから、低いところに流れる。株の動きは、自然現象となら変わりがない。それが従うべき法則だそうである。

ところが、そんなシンプルな法則も「欲」に目が眩んでしまえば、見えなくなってしまう。したがって、じつに皮肉な話であるが、金儲けの極意は、「欲」を持たないことという。とはいっても、これほど難しいことはない。

巷の噂で有望株と騒がれる銘柄に飛びつくような群集心理は、「欲」の塊である。短期に儲けるようなことがあっても、そのような心理で右顧左眄しているようでは、どこかで痛い目にあうことは目に見えている。

では、どうすればよいかということだが、群集心理の反対を行けばよいのである。皆が急上昇中の株があると騒いでいるようなときは、何もしなくて眺めておればよい。

ところが、ある企業が業績不振やら不祥事で急落して、誰もが争うように株を売りだしたときとか、日本の株式市場に訳もなく悲観論が広がって、投資家の心理が

萎縮してしまっているときに、動き出すのである。いってみれば、天邪鬼の心理である。

しかもそういうときに、大半の人がまったく注目してないにもかかわらず、その業務内容に将来性があるような企業に、こっそりと投資をしておくのが最上である。あと成すべきは、「果報を寝て待つ」だけであるという。

しかも、少なくとも五年間ぐらいは「寝て待つ」辛抱が必要である。その間、空っぽのバケツを木の下においておけば、おのずから蜜が溜まるという。投資した無名のベンチャー企業が上場した場合は、十倍、二十倍になることもあるらしい。

アメリカで「投資の王様」と呼ばれるバフェット氏も、一〇〇〇億ドルを超える資産を長期投資で築き上げた。どの銘柄に投資するかは、自分で調査し、自分の頭で考えることが大切で、決して群衆の狂気に釣られてはならないという。しかも一度投資した企業を徹底的に愛するという気持ちが大切で、その株を売るのは一生のうち、二、三度あればよいと言っている。

投資のプロ中のプロが語る投資のコツというのは、それだけのことである。ふつう投資家なら、毎日の出来高

とかチャートとかから目を逸らさないものだが、そんなものはほとんど無視してよいというから驚きである。

誰に投資しているのか

さてここから、いよいよ教育の話に移る。教育は未来に向けての投資とは、よく言われることであるが、確かにそうであるにはしても、われわれは一体誰に何を投資しようとしているのだろうか。

ふつう教育的に有望株とみなされるのは、いわゆる秀才である。将来、有名校に進学してくれるような生徒を重視し、彼らの学力を伸ばす教育環境を提供しようとするのが、教育者として当然の心理である。とくに、有名進学校のトップクラスの生徒は、上場一部の優良株のようなものである。

しかし、ここでK氏の投資哲学を思い出すなら、ほんとうに投資対象となるべき価値ある銘柄というのは、たいていの人が振り返らないような目立たないところに潜んでいるはずである。

ということとは、秀才とか優等生とかいうレッテルを貼られていない生徒の中に、じつは将来、大活躍する若者がいるかもしれないのである。というより、必ずいる。

だから、試験の点数が悪い、教師の聞き分けが悪いからといって、そんなに抜けていいような生徒はいないのである。ひょっとすれば、出来の悪い生徒や不品行とされる生徒の中に、日本の命運を担うような人材がいるのかもしれない。いや、きつといるだろう。

チャーチルやアインシュタインのように歴史に名を残した人物も学校では決して秀才ではなく、落ちこぼれであった。日本の戦後経済の牽引力となった松下幸之助や本田宗一郎も、若いときは秀才というような言葉とは無縁の存在であった。「大器晩成」といわれるように、大輪の花はおおよそ遅咲きなのである。

教師の中には、よくできる生徒ばかりをかわいがる人物もいると思うが、それは週刊誌上で注目株と騒がれる銘柄に群がる投資家の心理に似ている。もちろん、勉強ができる生徒の学力を一層伸ばすことは教師として当然の責務であるが、学力の劣った生徒一人ひとりの中から、埋もれたダイヤモンドを発掘するのは、教師としてもっと大切な使命である。

世間の耳目を驚かすような殺人事件を起こす少年が、いわゆる不良少年ではなく、じつは教育的な家庭に育った秀才であるケースが多い。その少年をよく知る周囲の

者は、「なぜ、あんなおとなしい子が」と首をかしげることが、自分の人間性ではなく、学校の成績ばかりを評価する親や教師に対する失望感が、犯罪に走る最初の動機になっていると考えるとよい。

毎日のように新聞で報道されている不祥事を起こしている高級官僚や企業トップも、大半が学校時代では秀才と呼ばれるべきのよい生徒だったはずである。彼らに一生懸命投資した教師は、どのような心境で教え子たちの栄光と没落を眺めているのだろうか。

また父親が開業医をやっているの、息子を無理やり医学部に入れたとか、僧侶がお寺を継がせるために、嫌がる息子を住職にしたということもよく聞くが、そういう貧しい発想こそが個人にとっても社会にとっても、不幸の始まりとなる。

まちがった株式投資が経済的損失をもたらすように、まちがった教育的投資も、人間として一番大切なものを容赦なく奪い取っていくことを忘れてはならない。

できの悪い生徒を大切にする教育

人間の才能など、どこに隠れているかわからない。また、その才能がどこで芽を吹き出すかもわからない。私

がかつて暮らしていたシンガポールでは、小学校四年生時に大学進学組と就職組に振り分けられる学力テストがあるため、テストの時期には、共稼ぎをしている両親が会社を休んで、子どもの受験体制に入るといふ珍現象が起きる。知的成長のペースに個人差の大きい子どもたちを早い時期から振り分けるというのは、不可解を通り越して、大きな罪であるといったほうがよい。

教育というのは、すべての子どもにも未来に向けて希望を抱かせることが、最終的な目的である。すべての人間には、生きる意味と生きる価値が与えられている。にもかかわらず、親や教師の偏った価値観から、若者の希望の芽を摘み取るような教育を施しているとすれば、これは深刻な問題である。

日本の子どもたちは、諸外国の子どもたちに比べて、自分の将来に希望を持っていないでいる率が高い、というデータが毎年出てくるが、学力水準の低下よりも、こちらのほうを重大視すべきではなからうか。

学校によっては、生徒たちの低い学力や落ちこぼれであるという劣等感のため、まともに授業が開けないところもあると聞いている。生徒も気の毒だが、彼らを教える先生たちは、もっと気の毒である。

一部の大学でも、授業が成立しないようなところがあるらしいから、驚きである。誰が何のために、勉強したくない子どもたちを大学にまで押し込んだのか。就職や結婚のために大卒の肩書きが必要だというのが、その理由なのかもしれない。だとすれば、そのような理由で勉強嫌いの息子や娘を大学に無理やり入れた親というのは、よほど信念のない人生を歩んできた人たちなのである。

しかし、そんな学校でも生徒が卒業するまでに、彼らの心の中に将来に向けて、何らかの希望の灯をともしることができるのなら、それこそ最高の教育的成果と呼ぶべきだろう。それは教師がその子たちの人間性を信頼し、愛情という最高の財産を投資したからであり、その事実が学校の先生が教え子たちを名門校へ送り出すこと以上に、社会的貢献度が高い。

日本国民は付和雷同性を克服できるか

私はサッカーのワールドカップ期間中、テレビをつけるのをためらった。なぜなら、メディアの騒ぎ方に不自然なものを感じたからである。決してサッカーというスポーツが嫌いなわけではないし、各国代表チームが世界

の頂点を目指して必死に戦う姿は美しい。

それでもワールドカップの試合の逐一を、すべてのテレビ局がトップニュースとして扱わなければならないほど、重大なイベントだとはどうしても思えない。ワールドカップ報道に使う経費と時間の、ほんの十分の一ほどでも割いて、今日も世界各地で爆弾や飢餓で命を落としている人たちのことを、なぜ報道しないのか。

福井・日銀総裁の株保有問題もそうである。日銀総裁という立場にある人が、特定の企業に大口投資をしていることに倫理的な問題がないわけではないが、法的な問題はなかった。それでなくても、海外では「世界一の中央銀行総裁」という評価さえあった人物を、「株で儲けたから」という理由だけで辞任に追い込むべきだろうか。

世論の中には辞任すべきという意見と、辞任すべきではないという意見の両方があると思うのだが、後者の意見を言えないファッショ的雰囲気を作ってしまうメディアの力は恐ろしい。

ワイドショーのコメンテーターあたりは、こぞって「もつてのほかだ。道義上、すぐ辞めるべきだ」と善人めいた口の利き方をするが、その画一的な発言内容に不

気味さを覚えてしまうのである。

成功した者へのやっかみ、嫉妬心を煽り立てるのが、日本のメディアの主たる役割となっているのは、情けない。特定の人物を指さして、「この女が姦淫を犯したのだ」と声高に叫び、大衆に石を投げつけるようけしかけている。

そのような群集心理を煽り立てるような報道の姿勢があちこちに見受けられ、それが間接的に教育の世界にも影響を及ぼしているように思われる。「皆と同じように勉強ができて、皆と同じようにいい学校に進学することが、いいことだ」という横並びの価値観が、その最たるものである。

島田洋七の青春を描いた『佐賀のばいばあちゃん』という映画が国民的人気を博しているのも、そのような世間の常識となっている価値観に正面から立ち向かう「ばあちゃん」の勇氣に憧れる深層心理があるからである。

要するに、株で一儲けするのも、子どもの人間性を伸ばすのも、群集心理に巻き込まれず、個々の人間が自分で判断する能力を持ち合わせていないことには、とうてい叶わないということなのである。